

気鋭の
肖像

(掲載日：2004/05/12)

May.2004 ② 文化社会学者 山中 速人

複合文化の可能性追う

ハワイ。その名は、海外旅行に行き慣れてしまった日本人の耳にも、独特の明るさをもって響く。常夏の太陽。青い海に白い砂。風が揺らすヤシの葉。まさにビーチ・リゾートの楽園一。

「それは観光産業によってつくられたイメージに過ぎない。ハワイは、どこに視点を置くかによって姿を変える不思議な島。多様な民族と文化の交差点なのです」

ハワイに住む人々は、ポリネシア系先住民、白人、フィリピンや中国系。そして明治から大正にかけて移民した日系人など。どの民族グループも単独では過半数にならないという多民族社会だ。「だれもがマイノリティー。島という閉ざされた環境の中で、『敵の敵は味方』との友敵論理による複雑な民族間の関係を発達させ、対立を避けてきた」

さまざまルーツを持つ人々が異なる価値の存在を認め、共存する。その実像と可能性を一九九三年、岩波新書「ハワイ」にまとめた。先駆的な視点はいまだ古びず、本は十版を重ねる。



複合的なハワイ人像。「血と民族は重ならない。それを知ると日本の常識は崩れる」

(撮影・神子素慎一)

元旦。ハワイの多くの日系家庭では、もちをついて新年を祝う。町にはクリスマスの飾りが残る。旧正月ともなれば、中国系の人たちが爆竹を鳴らす一。生活習慣が複雑に混在する島の姿に魅せられ、社会学の視点から20年以上にわたりフィールドワークを続けてきた。

それぞれの文化が自己完結しているのではない。市民は互いに招き合い、異文化との接触を楽しむ。「自分の出身以外の文化をつまみ食いするぜいたくが許されている」

こうして進んでいく文化融合の特徴を「快適原則」と名付けた。文化要素がより快適なら、自分のものとして取り入れる。例えば、室内で履物を脱ぐという習慣は日系社会から白人社会に浸透。しかし、正座は苦痛で広がらなかった。

「他民族間の通婚も多い。が、決して自分のルーツを忘れ、アイデンティティーを捨てるのではない」。異なる文化が融合する一方で、核はしっかりと保持されている。

「これが『複合文化社会』のモデルです。まるでチョコとバニラのミックス。それぞれ味を保ちながら、溶け合った部分では新しい素敵な味が生まれている。文化の多様性を認めながらも、異文化間が相互排除し合っている多文化社会とは違う」

日系のお寺が調査のベース基地。それが縁で僧籍も取得した。近年は学生を引き連れ、ハワイ諸島・カウアイ島で日系二世へのインタビューに情熱を傾ける。

サトウキビ畑での労働、戦争、日々の喜びや悲しみ…。老人たちの記憶を集め、家族写真をデジタル情報化する。調査手法として重視するのがビデオ撮影だ。「映像には思わぬものが必ず映り込んでいる」

伝統的なフラの踊り手のインタビュー撮影をしたとき、後で映像を見て衝撃を受けた。背景に米国製のスポーツカーが誇らし気に映っていたのだ。伝統にはそぐわない異物。しかし、こうした異質なものの影響にさらされ、それを栄養源に成長するのが文化ではないか。

「映像に残された豊かな雑音を他の人がどう読み解いてくれるか」。その可能性を信じ、記録を続ける。（仲井雅史）

やまなか・はやと 1953年、尼崎市生まれ。関西学院大大学院、ハワイ大大学院修士課程修了。社会学博士。2002年から関西学院大教授。メディア論研究でも知られ、著書多数。ホームページでは時事問題も論じる。芦屋市在住。

[<< BACK NEXT >>](#) [この連載のTOP](#) [HOME](#)

Copyright (C) 2004 The Kobe Shimbun All Rights Reserved